

宮岡薫著 『古代歌謡の展開』

宮岡薫氏の古代歌謡研究についての二冊目の書物である。昨年九月に刊行されたもので、すでにいくつかの学術雑誌には本書の書評が掲載されている。本誌でも早くにとり上げるべきであった。さて、本書は『古事記』・『日本書紀』、『続日本紀』、そして『日本後紀』までの史書に記載されている歌謡を対象としたもので、前著『古代歌謡の構造』に続くものである。

本書は歌謡がうたわれる声の世界のものであったことを踏まえつつも、あくまで書かれた書物の世界における歌謡と地の文の表現・叙述を問題にする。たとえば、本書における「歌の場面」というような概念も「歌い手」・「時」・「事象」・「歌の状況」・「歌日記事」などの事項を基本的な構成要素とする（三〇―四頁）と規定するように、文字表現によってなされた書物の世界を対象として、そこに細心の注意を払って分け入ろうとするのである。

その内容を目次によって示せば、次のようなものである。

第一編 『古事記』『日本書紀』歌謡の問題

真 下 厚

- | | |
|-----|-----------------------|
| 第一章 | 『古事記』『日本書紀』の民謡と芸謡 |
| 第二章 | 『古事記』『日本書紀』歌謡の歌体と節名 |
| 第二編 | 『古事記』『日本書紀』歌謡の場面の構成 |
| 第一章 | 『古事記』における歌謡の場面の構成 |
| 第二章 | 『古事記』にみる物語と歌謡との共通表現 |
| 第三章 | 『古事記』における歌謡の場面の展開 |
| 第四章 | 『日本書紀』の歌謡記事 |
| 第五章 | 『古事記』『日本書紀』に共通する歌謡の場面 |
| 第三編 | 『続日本紀』歌謡の展開 |
| 第一章 | 『続日本紀』御製歌の表現 |
| 第二章 | 『続日本紀』の饗宴歌 |
| 第三章 | 『続日本紀』歌謡の解釈 |
| 第四章 | 『続日本紀』「やすみし我々大君は」歌の表現 |
| 第五章 | 『続日本紀』の宣命にみえる歌謡 |
| 第六章 | 『続日本紀』「海行かば」歌謡の表現 |

第七章 『続日本紀』歌垣歌謡の性格

第八章 『続日本紀』歌垣歌謡の表現

第九章 『続日本紀』の歌垣と歌謡の表現

第四編 『日本後紀』の歌謡

第一章 『日本後紀』の飲酒歌

そして、これに、付録として、古代歌謡研究の文献目録、『続日本紀』歌謡研究の文献目録、それに『続日本紀』のなかの饗宴・歌舞記事の索引がつけられている。

この書のなかで中心となるのは、『続日本紀』歌謡を対象とした第三編の諸論考である。このような『続日本紀歌謡』を中心とした研究書は本書が初めてと云っていいであろう。本書の第一の意義はここにある。従来、『続日本紀』歌謡については、古代歌謡の注釈書などにおいて注釈的研究の成果がみられたが、これを多角的に論じ、統一的に研究した書は現われなかった。これは、古代歌謡研究の中心対象である記紀歌謡に比べて歌数が全四十巻のなかに八首ときわめて少ないこと、『続日本紀』という史書全体を文字表現という観点から捉えてこなかったことなどによるのである。もちろん、歌垣や酒宴など個々のテーマから、個別的に論じられることは従来からしばしばみられたが、著者は本書に収録された諸論文において精力的に論じてきた。しかも、著者の研究態度は、歌謡の表現を注意深く丹念に分析することによって、「解釈の正しさ」を追い求めようとしているのである。このような姿勢による客観性を堅持しようとしているのである。このような姿勢によ

つて『続日本紀』の全歌謡を考察した本書は、今後の『続日本紀』歌謡研究の基礎をなすものといえよう。

しかも、そこにおいて高く評価されるのは、『続日本紀』の地の文を単に歴史的事象を叙述するだけの記録的な文として取り扱うのではなく、歌謡と組み合う表現として扱っている点である。たとえば、その第四章「『続日本紀』「やすみし我」大君は」

歌の表現」において、歌謡に前置されている「因御製歌曰」という表現と歌謡と歌謡との間を繋いでいる「又歌曰」という表現に注目する。そして、「因」の前文に記す事項の内容を後文に記載する「勅」「願文」「奏」「勅書」などによって具体的に説く型があることを明らかにし、ここの歌謡もこれに類するものであつて、現実の場で機能することが叙述されているとみる。また、「又歌曰」という表現においては、記紀の用例を検討して、「共通表現のある歌謡をまとめるための作用を及ぼしている」（二四〇頁）としている。このように、地の文の表現を緻密に検討するのは著者の方法の特徴の一つであつて、すでに前著においてみられ（第二章『古事記』『日本書紀』の伝承と歌謡の交渉）第二節「記紀歌謡の記載」、第五節「タギシミミの謀反伝承と歌謡」、また本書においても他に第二編『古事記』『日本書紀』歌謡の場面の構成、第三章『古事記』における歌謡の場面の展開」、及び第五章『古事記』『日本書紀』に共通する歌謡の場面」で「以歌」、「如此」という表現がとり上げられ、検討されている。歌謡を収載する記紀や『続日本紀』という史書の文章を文字表現という観

点から取り扱うことの意義は評価されるものであり、またそのことが研究の実証性を高めるものともなっているのである。

一方、歌謡については、それがうたわれた現実の場における機能とともに文字表現によつて叙述される書物の世界における機能を明らかにしようとするところが、また特徴の一つであらう。

前著にも歌謡の「機能」という用語（あるいはそれに關わる「歌の力」などのような用語）が散見されたが、本書では索引によれば「歌の社会的機能」十一カ所、「歌の場の社会的機能」一カ所、「歌の機能」五カ所、「歌謡としての機能」・「歌の場面における歌の機能」・「饗宴の場における歌の機能」・「饗宴において与えられる歌と酒の機能」・「宮ほめの祝歌としての機能」各一カ所のように随所に頻出し、また索引にはとられていないが単に「機能」とのみ叙述されているところも何カ所か見出される。

このうち、最も多く用いられている「歌の社会的機能」という用語は、土橋寛氏が生みだしたもので、民謡がうたわれることによつて生じる現実の歌の場での聴衆や相手へのはたらきかけをいう。いわば、声の世界のものであつて、その生態を捉えようとするものである。

著者は、歴史的背景や宮廷儀礼を復元しながら、文字表現を通して歌謡が実際にうたわれ、またはうたわれたと想定される場における、このような機能を慎重に明らかにしようとする。第三編の『続日本紀』歌謡についての諸論は主としてこのような問題意識から論じられている。

そして、さらに記載された文字の世界における歌謡の機能をも追究しようとしている。これが「歌の場面における歌の機能」ということなのであらう。たとえば、第二編第一章「『古事記』における歌謡の場面の構成」では、『古事記』の「作御歌」という表現をとつてスサノヲ・雄略・顕宗がうたうというかたちの歌謡は「すでに歌われていた『御歌』の歴史性を具体的に表明することが目的であつた」（七五頁）とする。このような著者の問題意識を重ね合わせると、『続日本紀』に歌謡が記載される必然性も明らかになつてこよう。

ただ、それでも記紀歌謡と『続日本紀』歌謡との違いがいささか問題になるかもしれない。記紀歌謡の場合は記載以前の歌謡の伝承のかたちと書物の世界でのあり方との間にズレがあることが殆どであるのに対し、『続日本紀』歌謡は現実の場であつたあり方と書物の世界でのあり方とはほぼ一致すると思われるからである。

ともあれ、本書は今日の古代歌謡研究の大きな成果の一つである。ここでは、その大著の一端を紹介するにとどまり、十分なものとはならなかつた。著者にお詫びする次第である。

（和泉書院、A5判、四九七頁、一九九五年九月二〇日、一五四
五〇円）

（ましも・あつし 本学教授）